

老いを知る

—— 「鏡の中の自分」を見る——

自分を見ることは難しい。人の目は他人を見るようにはできているが、自分を見るようにはできていないからである。

鏡を見れば自分の老いはわかりそうだが、そういうわけでもない。自分を見ていると意識した途端、われわれはもう身構えている。自分の姿を見ていると思うだけで、実際より美化した「颯爽とした自分」を見てしまう。ソフトフォーカスのかかった「美しい自分」を見てしまう。鏡の中の自分は、やはり本当の自分ではない。

みずからを省みれば、50代になってから以前にもまして感情が鈍麻し、何事にも感動がない。青春時代のあの打ち震えるような感動がない。

『緑のハインリッヒ』や『モーヌの大將』を読んだ時のあの背筋のぞくぞくするような感銘、夜を徹して『チボー家の人々』を読んだ時の、あの圧倒的な興奮がない。

心のひだはますます厚く、立ち振る舞いはますます厚顔になる。何事にも訳知りになり、理想などとっくに失ってしまった。

10年、20年前の事なら鮮明に覚えているのに、5分前に聞いた事さえ思い出せない。

かつて見たテレビや、読んだ本も曖昧になる。前に見たことを忘れて再放送番組を見たり、同じ本をまた買ってしまう。しかも、かなり読み進んでいって、やっと前に読んだらしいと気がつく始末。

久方ぶりに会った大学の同級生も白髪で、眼もどんより濁り、歯も黄ばみ、肌もカサカサで艶がなく、動作もおっくうそうで覇気がない。

会場で椅子に座るにも、「ヨイショ」と知らず知らずに声を出している。「こいつも年をとったな」とは思うものの、自分も同じとは思わない。

だが、ヒゲを剃る時、何気なく見た鏡の中に老人を発見し、愕然とする。これが老いの実態である。

かつて、ラ・ロシュフコーは「太陽も死も見つめることはできない」と見抜いた。太陽や死と同様、「老い」も見つめることはできない。

——ウルマンの「青春」の詩——

だが、老いを絶対に認めない頑迷な人も数多い。

幻の詩人サムエル・ウルマンは「青春」の詩でこういう。

「青春とは人生のある期間ではなく、心の持ちかたを言う。年を重ねただけで人は老いない。理想を失うとき初めて老いる」（作山宗久訳。以下同じ）。

「青春」の詩は、再三、マスコミでカバーされたので、ご存じの読者も多いであろう。この詩にまつわるエピソードを描いた『青春という名の詩』（宇野収、作山宗久著）は、版を重ねている。

作者のウルマンは、1840年ドイツに生まれ、1924年アメリカのバーミングハムで亡くなった。彼はユダヤ教の改革派で、しばしば説教を行ったが、同時に市の教育委員や銀行の役員を務めた。

青春の詩は、アメリカではほとんど知られていないが、日本では熱心なファンが多い。財界の大立者であった石田退三（トヨタ自工）、加藤誠之（トヨタ自販）、松下幸之助（松下電器）、宇野収（東洋紡）、伊藤肇（経営評論家）など、ウルマンの詩に感銘を受けた財界人、ビジネスマンは数多い。

詩の一部を抜粋する。

青春とは人生のある期間ではなく、心の持ちかたを言う。薔薇の面差し、紅の唇、しなやかな肢体ではなく、たくましい意志、ゆたかな想像力、炎える情熱をさす。

青春とは人生の深い泉の清新さをいう。

青春とは怯懦^{きょうだ}を退ける勇氣、安易を振り捨てる冒険心を意味する。ときには、20歳の青年よりも60歳の人に青春がある。年を重ねただけで人は老いない。理想を失うとき初めて老いる。

ウルマンがこの詩をつくったのは80才の頃らしい。

「青春とは怯懦を退ける勇氣、安易を振り捨てる冒険心を意味する。ときには、20歳の青年よりも60歳の人に青春がある」。この部分がとくに高齢層に強くアピールしたのうなずける。

古語体の和訳は、高齢の財界人には情緒的にアピールするのだろう。だが、詩としては凡庸である。

——「美しい自分」に酔う人々——

だが、ちょっと考えると、この詩はかなり奇妙な詩である。いうまでもなく、青春とは人生の若い時代を指す。それが一般の使い方である。

野暮を承知で広辞苑を引いてみる。

青春とは人生の春にたとえられる時期で、12才から16、17才までぐらいの時期をいう。

ふつう青春とは「肉体的な一時期」を指すのであって、精神的なそれを指すのではない。だが、ウルマンは、「青春」の意味を換骨奪胎してしまう。「年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時初めて老いる」と彼は歌い上げる。

しかし、それは一種の現実失認、自己欺瞞であろう。まさに、鏡の中に「美しい自分」を見ているのだ。まわりを見回しても、わたし同様「怯懦を避ける勇気」や「安易を振り捨てる冒険心」などは、とっくに失ってしまった中高年が多い。

「肉体は衰えたが、精神は衰えない」というのは言葉のあそびにすぎない。人は加齢に従い、肉体も衰え、精神も衰える。まして、中高年ともなれば、その衰えは激しい。それがみじめな現実である。

——老化はじっと見つめられない——

青春の詩は、トップに居座る老人に、一時の慰みを与えるだけではないか？ 「老いを見つめられない老人」を鼓舞するだけではないか？

世の中には、地位に綿々と執着する老醜の人々がはびこる。政治家や経済人に特に多い。ある上場会社の社長が悪しき典型である。

役員会では、間違っても他の役員の席に座ってしまう。老眼が進み、書類は読むのも億劫。若手役員のような速度で報告書を読むこともできない。

確か2～3日前、部下に報告するよう指示したはずだが、確信が持てない。昔は部下を怒ったが、今は強く怒ることもできない。だから、くどくどと同じ事を繰り返す。決断力は鈍り、ついには判断力さえ欠けるようになる。

それでも「オレはまだまだ若い」などと、あちこちと動き回り、指示を出す。まわりが真剣にフォローすることはあまりない。「年寄りの冷や水」ほど困ることはない。多くの部下はそう思っている。

それもこれも、仕事一筋に生きてきたツケである。仕事以外に自分のやりたいことも、居場所も、生きがいも見つけられなかった。そのツケである。尻拭いをさせられる周りの者は、たまったものではない。

青春の詩に酔って「まだやり残したことがある」とか「生涯現役」とか「最後のご奉公」と公言するのは、彼らがまぎれもなく老いた証拠である。そう自らを疑った方がよい。もっとも、こういった類の人たちには、自らを疑うなどまあ無理な相談だろうが。

かつていかに勇気があるろうと、冒険心があるろうと、熱情があるろうと、老人は老人である。20代、30代とは、気力も、野心も、熱情も、全く違う。豊かな想像力は失われ、たくましい意志も萎え、燃える情熱もしなびてしまう。当然、冒険心はゼロ。理想を語るのも、気恥ずかしい。否応なしに丸くなる。

私自身を振り返っても、最近は感情が鈍麻し、何事にも感動がない。辛くとも寂しくとも、その現実を認めなければならない。

人間というものは、思いこみを離れて物を見ることは難しい。自分では客観的に見ているつもりでも、実は自分というフィルターを通して見ている。われわれは対象をそのまま見るのではなく、自分の見たいようにしか見ていない。このことを知るだけで、個人の生き方もずいぶんと変わってくる。だが、「自分は客観的に物を見ている」という頭の固い人がいて、こういう人たちは、自分がまだ本当に若いと思っている。

——青春は絶え間ない陶酔である——

日本人は、言葉に酔い、現実をゴマかし、空想の世界に逃げ込む癖がある。深刻な問題に直面すると気分が落ち込み「問題点は何か、問題にどのように対処するか」と考えずに、逃げ腰になる。真正面から現実を直視することが下手である。

辛い現実から逃れるため、現実を都合よくデフォルメするのは、幼稚である。老醜をゴマカして、いつまでも若いつもりでは、人生から手酷いシッペ返しを受けるだろう。老化を

正面から認めることこそ、究極の力である。

もっとも、当人はそれに気づかないで、周囲に迷惑を撒きちらし続けるだろうが。

老年になったら、人生のギアを、高速から低速に入れかえた方がよい。自分より若い世代が、社会の多数を占めていることを認め、後進へバトンタッチをして行けばよい。

青年には青年の、壮年には壮年の、老人には老人の生き方がある。50代には50代の、60代には60代、70代には70代の経験と知恵がある。

現実から目をそむけ、若さに執着するのは下手な生き方である。

自分の老いていくサマを正面から見つめ、今までの価値観を見直し、人生観を変える。

そして何よりも日々の生き方を変える。「老いた自分」を直視してそれを乗り越えるのが、老人の知恵である。

だが、なぜ青春をうらやむ必要があろうか。

辛辣家のラ・ロシュフコーなら、青春の詩には決して酔わないだろう。なにせ彼は青春をこう喝破しているのだから。

青春は絶え間なき陶酔である。理性の熱病である。

彼にとっては、青年も中年も老年も、流れ行く人生の一断面に過ぎない。青春も老年も同じ人生の一樣相にすぎない。なぜ、青春をうらやむ必要があろう？ なぜ、過去を懐かしみ、今を楽しまないのか？ なぜ今を生きないのか？

どうやら、人生には生きる哲学が絶対に必要である。